組織現勢（7月1日現在）

組合員数	19,918 人
出資口数	94,873 口
6月の新規加入	15 人
6月の増資口数	612 口

No. 384　再生紙を使用しています。

城南の保健

発行所
城南保健生活協同組合
本部事務局　大田区大森東4-6-15-101
TEL（3762）0266
振込銀行　さわやか信用金庫大森支店
口座（普）0469459
発行　「城南の保健」編集委員会
毎月1回発行・定価1部　30円

第40回通常総代会 6月27日(土)

- 平和憲法のもと戦争をしない70年の歴史を守ります
- 地域の要求に応える「誰もが安心して住み続けられるまちづくり」をすすめます
- 支部での活動を充実させていきます
- 経営的に強い生協にしていきます
- 地域包括ケアの視点をしっかりもち、組合員訪問を大きく展開します

支部の力を強め、住みやすいまちづくりをすすめましょう

誰もが平和で安全な国で健康で安心して暮らせるまちづくり

城南保健生活協同組合第40回通常総代会が6月27日(土)、大田区民ホールアプリコで行われました。お忙しい中お越しいただいた来賓のみなさまに心よりお礼申し上げます。

来賓を代表して東京南部法律事務所弁護士佐藤誠一さま、大森中診療所所長山本博さまにご挨拶をいただきました。また当日は総代のみなさんに熱心な討議をしていただき、2015年度活動方針（案）、予算（案）など8号にもおよぶ議案を賛成多数で採択することができました。

2014年度は仲間増やし年間目標（700人）を3年連続で達成し、これからのさらなる発展への大きな土台となりました。

また「戦争する国づくり」を許さず、安全保障関連法案（戦争法案）に反対する、第40回通常総代会アピールも行い、満場一致で採択されました。

今総代会を大きな力とし、地域における幅広い対話をすすめ、誰もが安心して住み続けられるまちづくり運動を広げていきましょう。

安心して暮らせる平和なまちのために

植田栄一理事長あいさつ

いのちと健康を守る運動を

今年は終戦70年、被爆70年の区切りの年です。国民の声に耳を閉ざす安倍政権の暴走が止まりません。「集団的自衛権の行使」についても、圧倒的多数の憲法学者が反対に立ち上がると「決めるのは憲法学者ではなく政治家だ」などと言い出しました。憲法99条は「天皇、国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ」とあり、政府は憲法を踏みにじる行為はただちにやめるべきです。

私たちはいのちと健康を守る民医連運動、医療生協運動の対極にある戦争につながるいかなる策動にも、断固として反対します。さらに、辺野古への新基地建設、教育やマスコミへの介入、原発再稼働・フクシマ切り捨て、消費税大増税、医療・介護・年金・生活保護など社会保障切り捨て、農業・農協つぶし、TPP推進、残業代ゼロ・生涯派遣の労働法制大改悪等々…暮らしと地域を壊す大暴走を皆さんとともにストップさせる運動を広げていきましょう。

さて、城南保健生協の活動では、2014年度は仲間増やしでの3年連続年間目標達成、介護職員初任者研修（旧2級ヘルパー養成講座）の開始、よろず相談では大森中診療所が月曜日から土曜日までの相談体制の定着、弁護士相談も月2回から3回に拡大、ゆたか診療所でも火曜・木曜の相談と月2回の法律相談となりました。

経営面では薬局・すずらん・虹の家で厳しい職員体制のもと、全職員のがんばりで事業規模を拡大して収入増を達成しました。残念ながら赤字決算となりましたが、介護職員初任者研修を3期開催し、修了者の皆さんに力を貸していただいています。

2015年度は介護保険制度の見直しがあり、大幅な引き下げが行われました。私たちの介護事業も大きな打撃を受けますが、介護職員処遇改善加算の確保や城南3法人の連携強化、その他さまざまな工夫をしながら乗り切っていこうと意思統一しています。2015年度も介護職員初任者研修を行います。ぜひ多くの方に受けていただき、城南保健生協の介護事業に参加していただきたいと思います。

最後に、この総代会が明日からの活動へのエネルギーになり、実り多い総代会になるよう、活発な討論で盛り上げていただくことをお願いいたします。

腹八分

Sさんは元小学校教員。昭和4年生まれ。今でも講演会に出かけたり、わからないことがあれば図書館に通う元気な婦人です。故郷の岩手県宮古市の女学校に通っていたころ、Sさんに勤労動員の命令が下りました。まだ15、16歳のSさんは級友と共に、東京大森の山王にあった旧宅に寄宿。そこから鶴見の軍需工場に通いました。労働はきつく、食糧事情も劣悪でしたが、地元鶴見から通う女学生と仲良くなったりと「青春」していました▼ある朝、仲良しの鶴見の女学生が工場に姿を現しません。横浜大空襲の焼夷弾で即死したのだと後で聞かされました。戦争は非戦闘員の乙女たちの命さえ保障できないほど悪化していました。地元宮古で校長先生を中心に、女学生を帰郷させようという声があがり、軍・官憲の目を盗むようにして実行に移されました。当時は鉄道事情も軍優先でしたが、同級生の父親に鉄道省に勤めている人がいて、毎日6枚ずつの切符を送ってきました。女学生たちは何回かに分散して宮古に帰れたのです。その時、同じ軍需工場に動員されていた男子生徒から「非国民」との罵声が浴びせられました。戦争は国民をも分断させてしまうのです▼いま、戦前がまたやってこようとしています。元教員のSさんは語ります。戦争をする国はいらない。取り戻すのは戦前の日本ではなく、死んだ人のいのち。親のいのちがあればよい。好きな人がいればよい。自分がいればよい。戦争は、日本の若者のいのちを奪う。